

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1213

（特殊な）見解に固執して論争を
しかけ、「これのみが真実である」
と言う人々がいるならば、汝はかれ
に言え、「論争が起つても、汝と対
論する者はここにいない」と。
（釈迦）

〈解説〉論争したくて、相手を見
つけては議論をふっかける。彼の目
的は何か。論駁して絶賛を得たいの
か。そのような場面では、対論するつ
もりはないと伝えよう。その論争は
無利益であるが故に無意味だから。
服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.4.2 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1212

六つの接触の領域の、生起と消滅
と味楽とわざわいと離脱を、ありの
ままに知らない修行者はだれでも、
清浄なる実践を完成していない。
（釈迦）

〈解説〉六つの感覚器官（眼・耳
・鼻・舌・身・意）で認識が生じる
時に、それを制御するとは何かを説
明している。文中の「味楽」とは、
喜びをあたえ、欲望をかりたてるも
の。「離脱」とは、どうすれば解放
されるかの意味である。
服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.4.1 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1215

宗教における偉大な新しい創造な
るものは、ことごとく、静かな祈り、
孤独な瞑想における魂の測り知れな
い深淵から現れ出るのである。
（ラーダークリシュナン）

〈解説〉ラーダークリシュナン
（1888～1975年）はインド
の哲学者で第2代の大統領。例えば、
モーセ、ブッダ、イエス、ムハンマ
ドなども、瞑想、高い英知（宗教体
験）を通してみずからの理想を實現
したと言えよう。
服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.4.4 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1214

「もしも敵を殺すというのである
ならば、」私はどれだけの敵を殺し
たらよいのだろう。敵は虚空に等し
いほど無数にあるから。しかし怒り
の心を殺したならば、一切の敵を殺
したことになる。（『入菩提行論』）

〈解説〉敵とは怒りの対象でもあ
る。しかし、それらすべての物事を
消し去ることなどできない。だが、
もっと身近で可能な方法がある、そ
れは、ただ怒る心を消し去ること。
服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.4.3 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心 No.1217

楽しいことがらに浮き浮きして高ぶり、苦しいことがらにがつかりして沈み込み、愚人どもは、ことさらに、あるがままに見ることなく、その両者に悩まされる。

（『テラガター』）

〈解説〉楽しいことには心喜び、つらいことには心沈み、それによって振り回され、前に進めなくなる。いろいろなことは生じるが、その中で妄執を超えた人は大きな石のように安定している。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.4.6 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1216

その籠を水につけよ、わが身をば法にひておくべきよし。（蓮如）

〈解説〉ある人が自分の心はカゴのようで、教えを聞いている場所では尊いと思うが、すぐにもとの心に戻ってしまうと言った。それに対しての答えが「そのカゴを水の中につけなさい、わが身を法（教え）の水の中に浸しておけばよい」であった。持ち帰れないから、自分の生活すべてを法に浸すとよい。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.4.5 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1219

何を憎沈となすのか。心を境（対象）において無堪任ならしむるを性質とし、軽安と正しく見る力の障害となるをはたらきとする。

（『成唯識論』）

〈解説〉憎沈とは、心が重く沈んでしまい、張りを失って気力がなくなり、進もうとする意思が持てなくなること（無堪任）。怒りのようにひどく人を傷つけないが、心身の平安・軽快（軽安）と正しく見る力を妨げる。これも煩惱の一つ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.4.8 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心 No.1218

何を掉拳となすのか。心を境（対象）において不寂ならしむるを性質とし、心を集中する実践の障害になるのをはたらきとする。

（『成唯識論』）

〈解説〉掉拳とは、心が高ぶり喧噪で、ウキウキして落ち着かない興奮状態。煩惱の一つに数えられる。それゆえ、ものごとを正しくみることができなくなってしまう。私たちの心にはこうした性質のあることを確認するのは重要だ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.4.7 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1221

七歳の童児も我に勝る者は、我は即ち伊に問わん。百歳の老翁も我に及ばざる者は、我は即ち他に教えん。

（『趙州録』）

〈解説〉自分より年下の者に教えるを請う時にプライドが邪魔しないだろうか。しかし、正しい教えは年齢に関係ない。道を歩む決意と覚悟の言葉だ。7歳の子供にも勝れた点は教わる。100歳の老人でも及ばないところは教え導く。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.4.10 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1220

初めよく、中ごろよく、終わりもよく、意義と文句とがそなわった教えを説け。

（釈迦）

〈解説〉教え導く際においては、すべてにおいて（初めも、中ごろも、終わりも）最初から最後まで）正しくて、善いものでなければならぬ。また、意義と文句とがそなわった、つまり、「内容も形式もそなわっている」、「筋道が通っており、表現の正しい」教えを説けという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.4.9 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1223

敵であっても、思慮ある者がよりすぐれている。味方であっても、思慮のない者はよくない。「蚊を殺そう」と、愚かな息子は、父親の頭を砕いてしまった。

（『ジャータカ』）

〈解説〉思慮分別の重要性を説く。蚊が頭に止まった男は、息子に追い払ってくれと言う。息子は張り切って、「お父さん辛抱してください」と、大きなナタを振り上げて父親の頭を打った。思慮のない者は危険だ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.4.12 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1222

このようにブッダは臨終に際して床に横たわって、四十五年間に説いた教えを「怠るなかれ」というただ一つの句のうちに要約して、与えたのである。

（『長部経典註』）

〈解説〉ブッダの遺言とも言える言葉「怠ることなく修行を完成しなさい」に対する注釈書の説明。45年間とは、ゴータマが35歳で悟りを開いて、80歳で亡くなるまでの教えを説いた期間をいう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.4.11 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1225

たとえ苦しくとも、もろもろの欲を制するべきである。このひとを「濁流に逆行する人」と人々は呼ぶ。

（釈迦）

〈解説〉私たちが生活する世間は、欲望を刺激し、欲望を満たす方向に流れている。欲望そのものは悪くはないが、それに流され暴走すると煩惱になる。であるから、欲望を制御するという自己修養の実践道は、世間の流れ、濁流に逆行するものである。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 4. 14 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1224

おのが罪過を指摘し、あやまちを告げてくれる聡明な人に会ったならば、その賢明なる人につきしたがえ。

（『テラガーター』）

〈解説〉自分の間違いを指摘されるのは心地よいものではない。しかし、自分の成長を願い、正しい道を歩む者にとって、これほどありがたいことはない。そのような賢明であり、勝れた友に出会ったならば、大切にし、いつも近くにいるべきである。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 4. 13 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1227

いつたい星に何ができようか。

（『ジャータカ』）

〈解説〉結婚のため、吉凶を星宿（占星術）にたよって、嫁を迎えに行く日を決めていた。しかし、祝いに適さないと、約束の日に行かなかったため、結婚が成立しなかった。そして次のようにいう。「めでたい星宿を待っていたが、御利益は愚か者を素通りして行った。娘をめとるといふ利益が、めでたい星宿なのだ」と。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 4. 17 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1226

客観的通観的な視点から見ると、どの宗教も他と対立している点では相対的であるという運命を免れない。

（中村元）

〈解説〉各宗教がそれぞれ自己の絶対性や完全性を主張して、相互に認めず他宗教を攻撃したならば、まさにその点において絶対的ではなく相対的である。しかし、各宗教の根本で共通する教え（例えば慈悲や愛の精神）に注目すると大切な点が見えてくる。

服部青郎・中村元東方研究所専任研究員

2019. 4. 16 中村元記念館協力